

06 空母機動部隊のルーツ

空母を最初に実用化したのはイギリス海軍だが、空母艦隊として大きな戦果はあげておらず、空母機動部隊と呼べるような空母艦隊を第2次大戦中に投入したのはアメリカ海軍と日本海軍だけだった。

空母は1920年代初頭には本格運用を開始したが、当時の空母搭載機は戦闘機や偵察機としてはともかく、雷撃や爆撃に使うには性能不足だった。結果として空母搭載機は艦砲射撃の着弾観測用に前方展開し、その行動を阻もうとする敵戦闘機を牽制、排除するのが艦上戦闘機の主な任務であった。しかし、1920年代後半になると飛行機のエンジンは強力になり、空母搭載機もさまざまな用途に使えるようになった。

空母が初めて実戦に投入されたのは、1930年代に入ってからのことである。1932年1月28日に始まった上海事変において、日本海軍の加賀と鳳翔が実戦に初投入された。海軍は事変を受けて上海に派遣していた第1遣外艦隊と青島の第2遣外艦隊、そして国内からの増援を統括する第3艦隊を1932年2月2日に編成した。加賀と鳳翔はこの第3艦隊への増援部隊として上海沖に派遣され、上海租界を警備する海軍陸戦隊や増援の第9師団などの陸軍部隊に対する航空支援を行なっている。

搭載機は中島三式艦上戦闘機と三菱一三式艦上攻撃機で、生田乃木次大尉が操縦する三式艦戦は2月22日、アメリカ人義勇パイロット、ロバート・ショートが操縦するボーイング218戦闘機と上海上空で空戦を繰り広げ、日本機として初戦果となる撃墜を記録している。

1937年7月には盧溝橋事件を発端として日中戦争(日華事変)が勃発、8月13日には第2次上海事変が起きる。



空母加賀と九六式艦攻。1937年の第2次上海事変における映像である。

第3艦隊には鳳翔、龍驥からなる第1航空戦隊、加賀が所属する第2航空戦隊が所属しており、8月15日には加賀から三菱八九式艦上攻撃機、中島九六式艦上攻撃機、愛知九四式艦上爆撃機が出撃、喬司、紹興、杭州、南京などを目指したが、悪天候により戦果はあまりなく、逆に犠牲は大きかった。

上海周辺には中国国民党軍のカーチス・ホークⅢ戦闘機が配備されており、戦闘機の護衛なしで作戦を行なった第2航空戦隊は7機が撃墜され、木更津海軍航空隊や鹿屋海軍航空隊の三菱九六式陸上攻撃機も15～16日に7機が撃墜されている。空母からの渡洋攻撃という点では重要な作戦であったが、護衛戦闘機の不足は致命的で、三菱九六式艦上戦闘機の開発が急がれた。

9月には九六式艦戦が加賀にも6機配備されたが、上海の公大基地に編成された第2連合航空隊に集中配備することになり、艦上運用はされなかった。8月15日の戦闘で第1航空戦隊所属機は荒天から離艦ができず、作戦を遂行できなかった反省からきたものだ。単葉の九六式艦戦は速度差を生かしてホークⅢを次々に撃墜、国府空軍を壊滅させたが、空母機動部隊の活躍ではなかった。

これが空母機動部隊のルーツと呼べる上海事変における航空作戦の概要だが、空母はプラットフォームとして使われただけで、その機動性が充分に生かされたとはいえない。日本海軍では戦艦中心の第1艦隊に第1航空戦隊、巡洋艦中心の第2艦隊に第2航空戦隊という具合に配備を固定化していたが、第2次上海事変における第3艦隊の運用はその垣根を取り払うもので、1940年6月

には第1航空戦隊司令官小澤治三郎少将が航空艦隊編成に関する意見書を提出、航空戦隊を統一した指揮系統下に置くことの重要性を訴えた。

その結果、1941年4月1日に編成されたのが第1航空艦隊で、世界初の空母機動部隊であったが、大きな誤りは小澤を艦隊司令官に充てず、航空作戦を充分熟知していない南雲忠一中将を任命したことであった。

第1航空艦隊最初の戦闘は1941年12月8日(現地時間7日)のハワイ真珠湾攻撃で、第1航空戦隊の赤城、加賀、第2航空戦隊の蒼龍、飛龍、第5航空戦隊の瑞鶴、翔鶴が参加する最大規模の空母艦隊となった。

搭載機は零式艦上戦闘機78機、九九式艦上爆撃機129機、九七式艦上攻撃機143機の計350機で、第3戦隊の戦艦比叟、霧島、第8戦隊の重巡利根、筑摩にも零式水上偵察機が3～6機搭載されていた。

ハワイ作戦の経緯は説明するまでもないが、戦艦の巨砲が航空機の爆撃、雷撃の前では役に立たないことを証明した大きな転換点で、当時でも色あせていた「大艦巨砲主義」が崩れ落ちた瞬間でもある。

ハワイ作戦に先駆け、地中海でも1940年11月6日にイギリスの空母搭載機による軍港への夜間空襲、ジャッジメント作戦が行なわれている。最初は地中海艦隊の空母2隻(イラストリアス Illustrious とイーグル Eagle)が参加の予定だったが、直前にイーグルが参加不能となり、イラストリアスのみでイタリア南部のタラント軍港に停泊していた戦艦を攻撃した。第1波としてNo.815 NAS(第815海軍飛行隊)に所属する12機のフェアリー・ソードフィッシュ雷撃機が、第2波としてNo.819 NASの同9機が別方向から侵入し、爆撃と雷撃で戦艦コンテ・ディ・カブール Conte di Cavour、リットリオ Littorio、カイオ・デュイリオ Caio Duilio を大破ないし中破させた。ソードフィッシュの損害は2機のみである。

イギリス海軍では、タラント奇襲の成功を機に航空主兵論が台頭、戦艦は落陽の時代へと向かう。その決定打となったのが、ジャッジメント作戦から1年余、前述の日本海軍によるハワイ奇襲であった。

真珠湾でアメリカ海軍は戦艦5隻を失う大損害を受けた。しかし、太平洋艦隊に所属していた空母レキシントン Lexington CV-2とエンタープライズ Enterprise CV-6は海兵隊をミッドウェー島、ウェーキ島へ輸送する任務に就いていたため真珠湾にはおらず、サラトガ Saratoga CV-3も修理のためサンディエゴにあって難を逃れた。

空母といえども停泊中に空襲を受ければひとたまりもない。

アメリカ海軍は歴史的な敗北を経験したが、旧式戦艦が沈没あるいは中破しただけで空母は被害を免れたから、太平洋艦隊は必然的に空母中心の艦隊へと生まれ変わる事となった。

アメリカ海軍は、イギリス海軍のタラント奇襲後も、空母搭載機の打撃力より戦艦の主砲の打撃力の方が大きく、費用対効果も大きいと考えており、空母はあくまで戦艦中心の艦隊に付随する戦力と考えていた。

しかし、空母搭載機の攻撃精度や運用の柔軟性を目の当たりにして、空母増産に大きく舵を切る。開戦時には正規空母が7隻しかなかったアメリカ海軍は、第2次大戦中に26隻の正規空母および軽空母を新たに建造、さらに商船改造の護衛空母も含めれば100隻を超える空母戦力となった。これに対して日本海軍の正規/軽空母の建造は15隻に過ぎず、戦力差は歴然だった。

アメリカ海軍では空母の数が増えるのに伴い、空母1隻とその護衛艦艇によりTF(任務部隊)が編成される方式から、TFの下にTG(任務群)、TU(任務隊)が編成され、TUに正規空母2～3隻、軽空母1～2隻が所属する方式に変更された。そして、複数のTUでTG(CTG=空母任務群の別名も持つ)を編成する。これがアメリカ海軍が誇るFCTF(高速空母任務部隊)で、商船から改造した足の遅い護衛空母は、FCTFとは別にTG/TUを編成した。

なお、アメリカ空母艦隊による最初の反撃は、1942年2月1日のマーシャル群島およびギルバート諸島への攻撃で、TF8/TG8.5のエンタープライズと、TF17/TG17.1のヨークタウン Yorktown CV-5が参加した。5月には珊瑚海海戦、6月にはミッドウェー海戦があり、空母機動部隊同士の海戦に発展したが、日本海軍の空母機動部隊の敗北で戦いの帰趨は決まった。

その後も桁違いの工業力と空襲を受けない地の利を生かして空母と搭載機を増産、パイロットを計画的に大量育成したアメリカに対し、虎の子の空母とその搭載機、熟練した乗員を失った日本海軍は、空母戦力を復活させることはなかった。

アメリカ空母が最も多く参加した戦闘は、1944年10月から11月にかけてのレイテ侵攻、マスキティア作戦で、正規空母11隻、軽空母7隻が参加、護衛空母10数隻が航空機輸送に出動した。

Q6 タラント軍港空襲に当初参加予定だった英空母の隻数は？

1 2隻

2 3隻

3 4隻

4 6隻

世界の艦船 2012.3増刊

27